

芳香の始まりの頃

大塚 榮子 (1期)

医学部薬学科に移行したころには5講座でした。遅れて発足した薬品製造の伴先生は留学から帰ったばかり、30代前半の教授でした。助教授の金岡先生、助手の大石先生、米光先生方は当然若く、当時は教務職員を助手のように採用することができて、5名のグループを形成できました。薬効学は更に遅れてできたと思います。薬理学の講義は医学科の学生と一緒に大講堂で聴きました。解剖学は3人の教授から、病理の講義では解剖見学までありました。生理学の講義では「Zwei Herzen mit inem Schlag」?というドイツ映画の題名だけが記憶にあります。就職試験のためには薬理学の参考書を買って勉強したようです。

学生も先輩がいないので、若い先生たちと中庭でソフトボールなどをして遊びました。ウルトラクサシストという評判の米光先生のはだしの足を靴で踏んでしまいました、「俺の足が下にあるのが悪いんだ」というお言葉でした。

2年生で大変だったのは薬化学の水野先生の講義で、Fieserの有機化学を半年で詰め込まれました。

毎週土曜日には試験があり期末試験ではテトラコンまでしてもらった者もいました。水野先生は学生をいじめ過ぎてか結核を発症、北大病院に入院されましたが、ストレプトマイシンのおかげか無事全快されたと思います。4年の教室配属の頃にはニューヨークに留学されており、助教授の池原先生が留学から帰ってこられました。

芳香創刊号によるとクラスの団結のために雑誌を作るようになったようで、先生方の投稿もあり、熱意が感じられます。「芳香(かおり)」と名付けたのは池田(旧姓:松田)瓔さんで、文学的センスがありました。瓔という字は北大卒業生の伯父さんが寮歌の中から選んだと聞きました。表紙をデザインしたのは松原信義さんです。定年後、多摩美術大学でエッチングを学んでいましたから、絵心があったのでしょう。編集をしていた学生は広告を取り、ガリ版を刷り、大変だったと思います。7月と12月の発行でクラスの討論の様子などがうかがえます。医学部学友会にも参加することになり、大運動会をして記念の手ぬぐいまで配ったようです。



芳香には伴先生のパークレー校便り、池原先生のノースカロライナ大留学記があり、当時の文部省は留学制度に熱心だったようです。国家予算の乏しい中、明治以来の伝統を守っていたのでしょう。

学科新設の経緯は松田彰先生の北海道薬剤師協会の記事にもありますが、民間基金がないと設置もむつかしく、復興から間もないころですから住宅事情は悪く、学内ばかりではなく学部内にも住居があったほどです。武田泰淳は文学部教授になり、現在の学術交流会館の所にあった建物に住みましたが、

寒くて一年で逃げ帰ったと書いています。

薬剤師協会の寄付の薬学期成会が2, 3年後に北27条に教員住宅を造成して、木村先生、池原先生、手島先生が住んでおられました。その後、新設講座の生化学の石井先生、微生物の石本先生が入居されました。

写真: 北大医学部講堂

同窓会 HP:2022年10月20日公開